

今回は、徳島県で苗の生産・販売を行なう竹内園芸の山中高志氏が、愛媛県で米麦等の生産・加工・販売を行なうジェイ・ウイングファームを訪問した。竹内氏と対談したのは同社に就職して3年目を迎える齋藤碌氏。米国での農業研修経験もある齋藤氏は、米国で新たに気付いた日本の魅力や農業者としての課題、理想の農業者像について語った。

山中 こちらの農場では主に米麦を作っているそうですね。

齋藤 ハイ。米麦を中心に、冬期にキャベツやカリフラワー、チンゲンサイなどの野菜も生産してます。総面積は約100haになりますが、地域によっては等高線状の水田も多くて、1000枚以上の圃場があるんですよ。

山中 それは凄いですね。

齋藤 高齢化や後継者がいないという事情もあって、田んぼを管理したいけど自分では難しいという農家さんから、土地を使って欲しいという話が来るんです。そういう話は基本的に断らない方針なんです。信頼関係を築く意味もあって、どんな圃場でも、できるだけ引き受けています。

山中 販売はどうしてるんですか？

齋藤 加工も販売も自社で行なっています。ちなみに、モチムギという



リレー訪問 農場に勤める誇りと夢

第22回

「夢は百姓」と言われる百姓に……の巻

穀物も作っていますが、これは穂が紫色になるので景観上も変化があった面白いですよ。昔からこの地域にあった作物で、粉状にしたものを団子にして料理に使っていたそうです。社長がそれに着目して作り始めたんですが、少しずつ認知されてきて、今では大手の加工業者さん、ペーカリーショップやケーキ店などでも扱ってもらえるようになりました。

山中 それは契約栽培なんですか？

齋藤 ハイ。野菜の方も契約栽培です。作った作物がどういうところで売られているのか、どういうお客さんが買っているのか、これが見えないところとは契約しないというポリシー

今月のゲスト

山中 高志 (30歳)

出所備

身：広島県広島市

属：(有)竹内園芸 (徳島県板野町)

考：1977年生まれ。2002年、徳島大学大学院エコシステム工学専攻修了後、建設機械の製造・販売を行なうコベルコ建機(有)入社。海外部品グループに配属。07年、野菜苗・花苗を生産する(有)竹内園芸に入社。現在、IT・システム担当。

シーでやっています。お客さんのニーズに答えられないものを作っても仕方がないですから。

山中 たしかに。ところで齋藤さんはどういう経緯で、こちらの農場で働くようになったんですか？

齋藤 この農場で働き始めたのは大学生のときです。先にアルバイトとして勤めていた友人に、農繁期で忙しいから手伝ってほしいと誘われたのがきっかけです。今は、社員になって3年目なんです。その前は、国際農業者交流協会の海外農業研修に参加して、2年ほど米国の農場で働いていました。

山中 もともと農業には関心があつたんですか？

齋藤 第1次産業という意味では関心がありました。でも、本当の意味で農業に興味を持ったのは、この農場に来てからです。それまでは、農業といえば暗いというイメージだったんですが、うちの社長は明るいというか、すごく多才で、おしゃれだし、暗さなんて微塵も感じさせないんです。農業のイメージが変わりましたね。そういうえば、社長も過去に海外農業研修に参加しているんですよ。僕がその研修に参加しようと思ったのも、そばで社長を見ていて影響を受けたからなんです。

山中 というと？

齋藤 当時、情報化社会や国際化ということが騒がれていて、パソコンやインターネットが脚光を浴びていたんですが、僕は、インターネットがあれば国際社会の一員なのか、小学生に対して鉛筆の変わりにパソコンを与えることが教育として良いことなのか、ずっと疑問だったんです。

でも、社長を見ていると、各地にいる海外農業研修の同期の人たちから作物が届いたり、人づてに情報もたくさん入ってきたりします。なんというか、ものすごく心がリッチなんです。それで、僕もそういうネットワークを作りたいと思うようになったんです。

山中 じゃあ、今は……。

齋藤 今は全国に70人くらいの同期がいて、連絡も取り合ってますよ。

山中 そうなんですか。ちゃんとネットワークができたんですね。ちなみに、研修先はどういったところだったんですか？

齋藤 僕が行ったのは肉牛の繁殖をしている、いわゆるカウボーイがいるところでした。どうせ米国に行くなら、ということ自分で自分から西部劇みたいなどころに行かせて欲しいとお願いしたんです。でも、ポコポコにやられて帰ってきたという感じがですね。それはもうタフな仕事で、歯を食いしばってやってきましたから。



山中 そんなに大変なんですか。

齋藤 おかげで相当鍛えられましたし、学ぶことも多かったですね。特に、彼らが「誇り」を持ってやっている点には、日本の百姓との違いを感じさせられました。しかも彼らの子供は、ものすごく生き生きとした目をしていて、父親みたいになるんだって言うんですよ。これは凄く思いました。やっぱり誇りがあれば、そういう人を見て、やりたいという人が出てくるんですよ。たとえれば、消防士なんて命を懸ける仕事なのに、ずっと子供が憧れる仕事なんです。それはやっぱり誇りを持ってからなんです。

今月のホスト

齋藤 碌 (26歳)

出身 身：京都府南丹市
所属 属：(有)ジェイ・ウィングファーム（愛媛県東温市）
備考 考：1981年生まれ。愛媛大学農学部在学中からアルバイトとしてジェイ・ウィングファームに勤務。2003年同大学卒業後、(社)国際農業者交流協会の海外派遣プログラムに参加し、米国の畜産農家で2年間研修。05年帰国、ジェイ・ウィングファームに復帰。現在、入社3年目。主に生産部門を担当。



山中 日本では、そういった様子があまり見られないですよ。

齋藤 残念ですが、そうなんです。米国には、国土や資源がある。人も資源がない。頼みの綱は人なんだけど、若い人の目が生き生きしてないんです。日本に帰国した時、こういう状況では国として成り立たないんじゃないか、そう思いました。

山中 海外に出ると、そういうことが見えるようになるんですよ。僕は前職で中国に海外出張していたことがあるんですけど、食べ物ひとつとっても日本に対する見方が変わるようなところがありました。

齋藤 そうなんです。僕も日本の食べ物の素晴らしさは実感しました。パリエーションの豊富さと繊細さ、これは凄いです。僕が行った研修先の朝食は、まずパンケーキ、日本というホットケーキなんですけど、それと半熟の目玉焼きと炒めたベーコン。毎朝これなんです。もう飽きる飽きる(笑)。

山中 日本でホットケーキといったら、おやつですからね(笑)。

齋藤 それに米国では、日本の食に対する評価が高いんですよ。味噌や豆腐、醤油も一般家庭に普及してる。食べ物だけじゃなくて日本の文化や道具、技術が海外でどれだけ高く評

価されているかを日本人自身が知らなさ過ぎるんです。こういったことを僕らの世代が学んでおかないと。

山中 そうしないと、次の世代には何にも残らないですよ。

齋藤 そうなんでしょう。そういったことは農業の場合にも言えることだと思うんです。例えば、大型のコンバインにはエアコンやラジオも付いていたりして、一見、近代的な機械なんですけど、中を見てみると足ふみ脱穀機の胴のような装置があるんです。要するに昔の人が持っていた技術を箱に詰め込んで、それをエンジンで回しているだけ。でも、僕らの世代はそれすら知らなくて、トラブルがあっても何もできないんですよ。これに僕は危機感を覚えますね。

山中 たしかに。

齋藤 会社の人に教わったんですが、「百姓」という言葉には、百の知恵を持つという意味もあるようなんです。知恵があれば何にでも応用できる。これからは、その知恵を身に付けていかないと。

山中 僕もそう思いますね。

齋藤 幸いにも、うちの農場には「鍛冶屋さん」のような役割を担って人の役に立ちたいという志を持つ方が来てくれているんです。昔は、鍛冶屋さんが村に1軒はあって、たと

えば鍬の柄の長さを使う人にあわせて調整してくれていたようなんです。そういったことを、以前、農機メーカーで開発を担当していた方がやりたいと言ってくれていて、僕もいろいろと教えてもらっているところなんです。

山中 いいですね。ところで齋藤さん自身は、農業に対してどんな魅力感じてるんですか？

齋藤 僕とはかく何でもやってみたい人間なので、どんどん挑戦していける仕事は何かを考えたときに行き着いたのが、やはり農業でした。農業の可能性は無限にあると思いますね。しかも、いろいろなことと結び付けられるじゃないですか。たとえば、モチムギが作る景観は地域貢献にもつながるものですよ。

山中 そうですね。

齋藤 そんな可能性がたくさんあるのが農業なんだと思います。といっても、若い人間は生き生きしてなければいけないという考えの社長がいて、僕らのそういった想いを受け止めてくれるからこそ、こんなことが言えるのかもしれないですが、とにかく僕としては、これから30年、40年と百姓をやり続けていく中で、子供に「将来の夢は百姓」と言ってもらえるような、誇り高き百姓になりたいですね。(つづく)